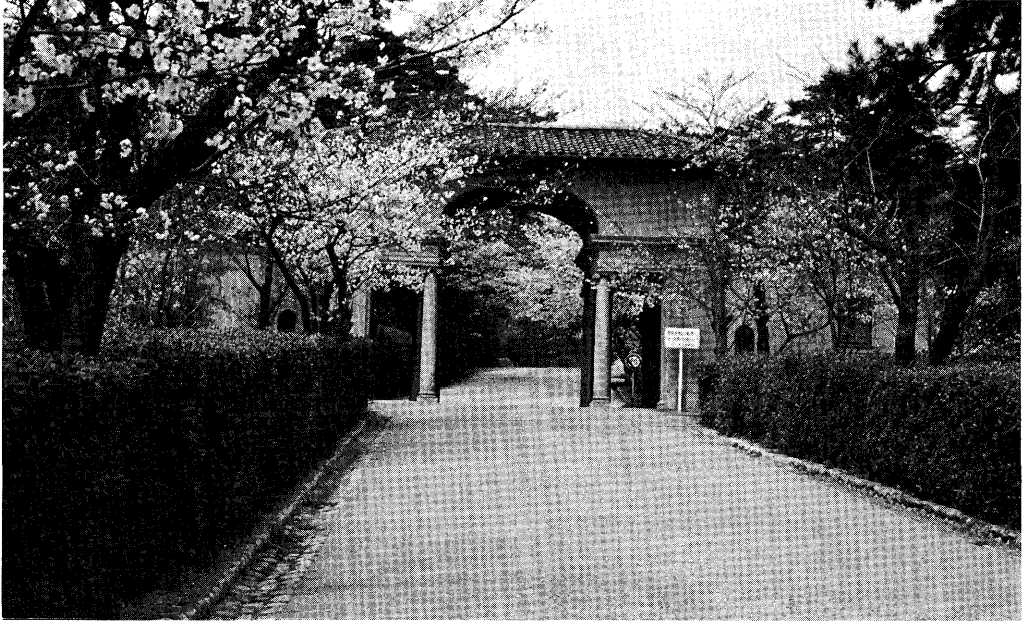


NO. 6
March '89

NEWSLETTER

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート



さりげなく、〈女性と人権〉

蜂屋正秋

私は、今年定年で退職するわけですから、大正12年生まれ、従っても心ついてからは昭和の戦乱の時代、本当に苦勞したものです。昭和6年(1931年)満州事変勃発、昭和12年(1937年)日華事変、昭和16年(1939年)第2次世界大戦突入となるわけで、自分の青春が日本の帝国主義戦争に振り回されていたことに今更ながら驚かざるを得ません。

その頃は、戦場に立つ者は男ですので、旧来の男尊女卑の儒教的道徳観がますます強調されるような風潮が強かったのです。

私の家には、当時としては比較的、人間的差別(広い意味での)を許さない雰囲気があったと思います。

例えば、小学生の頃、学級に2名の知恵遅れの子がいて、皆がからかったりしていました。私はもちろんその仲間に入ったりしませんでした。何せ子どものことで、時に無茶なことを云ったり、したりすると、つい「馬鹿野郎」なんて云って、差別する側の一員となったりしました。そんな時のある日、母親に呼びつけられました。平生一度も叱ったことの無い母親が、実にきびしい顔をして坐っているのです。「正秋、さっき〇〇君に云った

ことをもう一度云って見なさい。人間には努力して治ることと、治らないことがあります。努力しても治らないことを取り上げて、はやしたてるのは卑怯です。立派な人間のすることではありません。よく考えなさい。」と、びしゃっとやられました。この想い出が、今も、私の心に深く焼きついています。

そう云っても、当時の男尊女卑の風潮の中に私は育っていたのです。そのことについて、2つだけエピソードを述べてみたいと思います。

私の従姉(現在はアメリカ市民になっています)が、アメリカの大学を出て、何度も日本へ留学して来ていました。当時はドルが強かったし、また日本語も覺つかなかったもので、小学生の私をよく旅行に連れていってくれたものです。そんな時、私の家に永く逗留していました。今でいうとホームステイみたいなものですね。ところが、私の家にはこの従姉と同年令の姉がいて、極く普通の日本の娘として育てられていました。いわゆる良妻賢母型に。

ある日従姉が私に云いました。「正秋さん、お姉さんばかりいろいろ仕事をして、お気の毒と思わないの、お風呂たいてきてあげては。」当時の風呂は、薪や石炭で、煙に責められながら燃やす難行苦行だったのです。そんなことを男の私がするなんて。アメリカ育ちの親しく尊

敬する従姉にやんわりと指摘されて、正に脳天の一撃でした。彼女にとっては、日本の家庭の中での男と女の地位や役割について、すごく不合理を感じていたのだろうと、今さらながら思います。

そんな雰囲気の中で育ち、どっぷりとその中に漬っていた子どもの私には、何の自覚もなかったわけです。それを指摘され、考えさせられた強烈な印象、それが新鮮な印象として今も脳裏に残っています。

次のエピソードは、戦後（昭和22年頃）のことです。親しい友人の家に招かれて一泊しました。戦争も終りお互いに何とか無事復員して、久しく一夜を語り明かして翌朝、寝ばけ眼で起き出してみると、何と長男の彼と2人の妹が廊下の拭き掃除をしているのです。それも極く自然な雰囲気の中で、冗談など言いながら。私はびっくりしてしまいました。彼の父は実業家で、コチコチの軍国主義者だと知っていたので、なおさらこの朝の光景を見てびっくりしてしまったのです。どうなってるんやろ、長男の彼が、妹2人と嬉々として廊下を拭いている。私の従来の観念では、私の家庭の雰囲気では想像もつかないことなのです。

古い時代のことを書いているようで、現代に生きる若い方々には、何を云っているんだという眩きが聞えるような気もしますが、これが当時の私たち世代の偽らざる感懐として受け取ってください。

終戦後、私たちはしばしば下宿で読書会をし、夜を徹して談論風発し、青春の一時期を燃焼させていました。天皇制護持の問題から始まって、サルトル、カミュなどの実存主義、そしてマルクシズムへと思想の大変動を経験したわけです。しかし、それらは、観念の世界を飛びまわっていたような気がします。

何気ない日常生活の中に、男女差別の問題も融け込んでいくことが一番大切なのではないのでしょうか。男性と女性とは、もちろん生理的にも心理的にも違っています。しかし、同じく人権が尊重されるという状態、社会が実現されていくこと、それが極く自然であたりまえのこととなっていくことが、人類の歴史の大きい方向だと思います。

法的に、世界人権宣言、男女雇用平等法などで規制されることも、客観的条件の改善ということも、もちろん大切です。

しかし、それにも増して世の人々の意識の変革が大切に、事実その方向に進行していつているし、その努力も続けられているのではないのでしょうか。

最近の事件として、アメリカから来ている中学・高校のパートタイム・ティーチャーが、日本に留って高校教師として勤めたいとのことで県教委に申請したところ、採用希望の高校側から履歴書の提出を求められ、それに顔写真を貼付することになっているのに驚き、「何故そ

れが必要か」と尋ねたところ、「白人ならいいが、黒人なら駄目」と答えたため大問題となり、目下係争中とのこと。アメリカでは、性別、年齢も履歴書には書かない傾向にあると聞きます。

日本人の人権に関する意識の低さを物語るものではないでしょうか。

最後に、被差別部落の女性について触れてみたいと思います。多くの差別問題からくる矛盾は、部落差別に集斂されるといわれますが、女性問題についても然りです。

部落の女性は、三重の差別を受けています。すなわち被差別部落民であるという差別、女性であるという差別、そして女性であるため十分な教育を受けられなかったという学歴差別です。そして、そのことに部落の婦人たちの怒りは大きく、自覚は運動へと展開し、大きな社会的力を発揮しています。

世界の歴史の中で、時代は大きく人権尊重の方向に動いています。我が国における「女性と人権」の問題も、この流れの中でとらえられなくてはならないでしょう。

男性と女性といった対立的なとらえ方でなく、性的な相違のある者同志が、同じ人間としてお互いの人権を認め合い、それがあたり前のこととなり、さりげなく振舞えるような社会を早く実現したいものです。

日本における女性学の現状

国立婦人教育会館の調査によると、昭和63年度の女性学関連講座開講大学数は全大学数の12.7%に当たる135校で、この5年間に開設校は増加しているという。

このうち、女性、婦人などが名称に使われている科目が全体の1/3、名称には使われていないが既存の学問分野で女性の問題を捉えようとするものが2/3ある。前者には「婦人論」「婦人」「教育論」「現代婦人論」「女性・男性・社会」「男と女」「女性問題」「女性学」「女性論」「フェミニズムの現在」「女性史」といった講座、科目名があり、後者には「歴史」「人権」「家族」「家庭」「労働」「教育」「文学」「法律」「言語」などがある。

内容の変化としては、1984年ころには稀少あるいは皆無であったテーマ、フェミニズム、ジェンダー、性差、母性、生殖、両性関係、人権、差別などを掲げる科目が増えていることがあげられる。

女性学関係研究所を設置している大学としては、神戸女学院大学をはじめ、お茶の水女子大学（女性文化センター）、東京女子大学（女性学センター）、東横学園女子短期大学（女性研究資料ライブラリー）、目白学園（女子教育研究所）、比治女子短期大学（女性文化研究所）、福岡女子大学（女性生涯教育資料室）の8校がある。ただし女性学という名のついた研究機関は本学と東京女子大の二校だけである。

この他、女性学関連講座を学外者に開放している大学

としては、自校の学生のために単位取得講座、科目として設置したものを同時に学外者にも公開している大学が6校、当初より学外者向け公開講座として開設している大学が5校ある。本大学でも近い将来に単位が認定される女性学関連講座が開設されることを期待したい。

ちなみにアメリカでは1982年に女性学 (Women's Studies) は450プログラム、3万講座に発展し、今では全米ほとんどの大学で設けられているという。

(文責 黒木)

新刊図書紹介

『からだ・私たち自身』

ボストン女の健康の本集団著 監修 藤枝滯子
校閲 河野美代子 荻野美穂 松香堂、1988.10

アメリカの女性解放運動から生まれた *Our Bodies Ourselves: A Book by and for Women* が1971年に出版されて以来、再版を重ね広く世界中で読まれ (11ヶ国語で出版) 影響を与えたが、その改訂版 *The New Our Bodies, Ourselves* が1984年に出版された。1971年のもの比べて量は増え、新しい問題や関心そして70年代から80年代にかけての変化などを反映した内容となっているが、その精神やスタイルに大きな変化はない。

日本語訳としては1971年の原書の抄訳が『女のからだ一性と愛の真実』と題して1974年に出されているが、今回日本で出版された『からだ、私たち自身』は改訂版(1984年)の全訳で、しかも日本の情報と写真に日本人モデルが使われているのがいい。

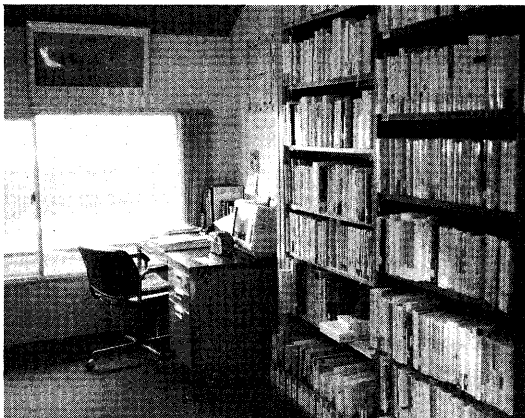
『からだ、私たち自身』(1988)

Our Bodies Ourselves (1971)

The New Our Bodies, Ourselves (1984)

いづれも、当インスティテュートの資料室にあるので閲覧、貸出できる。

(文責 黒木)



女性学インスティテュート資料室

女たちよ、男たちよ

前号からもうけられたコラム「女たちよ、男たちよ」に、今回は今年3月で退任される先生方に執筆をお願いいたしました。

「女たちよ、男たちよ」

林 達 次

ばくの場合は、うた歌いなので、社会的な現象としてではなくて、歌の世界の中で男と女を考えます。

女の声、男の声は夫々異なる中でバランスをとってアンサンブルがつくられていきます。四声とはソプラノ、アルト、テノール、ベースがあり、上の2つは女声、下の2つは男声でできています。おおまかに言って、音域的に男女はオクターブの違いがある中で合唱が成り立っているのです。

しかし歴史的に見ると、ヨーロッパの教会では、上の2つのパートを歌うのは今のように女性ではありませんでした。女性は歌うことが許されなかったのも、そこは声が変わりする前の少年たちが歌っていたのです。有名なウィーン少年合唱団というのは、ウィーンのプロフ・チャペルで行なわれる毎日曜日のミサで歌うべき子供を養成する目的で、12世紀につくられたものだったのです。

混声合唱といってもこのように、ついこの間までは男だけでやっていたのです。オペラでも同様に、19世紀前半までは女性が劇場に出ることが許されず、人工的に去勢された男性(カストラート)が女性のかわりに歌っていました。したがって、劇場で男女がアンサンブルができるようになった歴史は短いのです。ヨーロッパだけでなく、日本の芸能の中でも能楽や歌舞伎は男性だけで今なお演じられています。

現在、女性のいないオーケストラはほとんどありませんが、ウィーンフィルハーモニーだけは今も断固として女性をいれていません。オーケストラは器楽だからいいが、声となると女声のかわりはできません。本来の美しさは、女性の高い声と男性の低い声がアンサンブルになることにあると思います。近代までは、前述のとおり本来の意味での混声合唱というものはなかったのです。したがって、大作曲家のつくった曲に女声合唱曲用はほとんどなく、今でもその傾向は強い。

しかし日本では、日本特有の現象として、最近お母さ

んコーラスを源泉とする女声合唱が量も増え、質的にも向上してきています。戦後女性が家庭から解放され、核家族化、家事労働の電化、ライフスタイルの変化などによって、時間的、経済的余裕を持つ女性が増え、このような現象が見られるようになりました。西洋の音楽の歴史では、かつて見られないことです。お母さんコーラスのような新しい音楽、そしてそのエネルギーは注目に値します。しかし、合唱は男女が夫々の声で響きあうというのが一番望ましい状態だと思います。日本で、女性は時間的、経済的余裕はあるが、男性には時間的余裕がなく、せいぜいカラオケくらいしかないでしょう。

男性は男性の声の特長およびその良さがあり、女性には女性の声の特長と良さがある。片方だけの声ではもの足りないし、むりやり子供の声を使ってももの足りない。男女、夫々が相助け、相補うのがもっとも望ましい声のアンサンブルであって、中世や近世の男性本位でも、またお母さんコーラスのような女性本位でもものたりないので、やはり芸術的には男女が夫々の特徴をもって一つのアンサンブルをつくり上げていくのが理想だと思います。

SECSについて ＝偽英語学的考察＝

ヤマベ シゲル

20年ほど前、ガンの生化学の第一人者 Ketterer 教授をロンドンに訪問した折、Middlesex Hospital なる名称の意味が私にとって不明であった。これが自分史の中で、Sex について思案をめぐらした第三回目であった。そして第四回目が、このたびの執筆依頼である。後年や英語学の素養? ができてから、Sex はラテン語由来の Sec、区分ということ、そしてヒトを区分すれば女性と男性が自然な方法であるが故に…と考えた。従ってあの病院は、ロンドンの東区と西区の中間区にあるが故に…と解した。

医学用語で Sec を語頭にもつものに、Secretion (分泌) がある。液体が腺細胞から分かれて出てくるからそう命名されたのであろう。子は母から生れると単純に考えれば、男たちは分泌液つまり唾液の如きものであるのか…いささか情けない。されども、分泌液の単純作業が不調のときは、ヒトは病態になることも、女たちよ忘れないで。

Sec 言葉には Secret とか Security とか重要なものがある。はたして秘密保持とか安全保証などは、いずれの性がすぐれているのかな? 次は Second (シャレではなくて)。Lady First だから、これは男たちのことだ。改めて辞書をひらいて驚いた。もともと Second という

のは、相等しい部分の片方のことをいうと。それがいつのまにか、次席・二流・劣等というように使われている。果たして男たちは、そうであろうか?

医学に戻って考えてみよう。Second Sight は予知能力を意味する。女性は First Sight という語はないけれど、生理学的な視覚を直ちに大脳辺縁系に投影して微妙な情動活動を生じ、男性の諸活動をコントロールする能力もっている。男たちよ、しっかりせねばならない。

そして男たちよ。すぐれた予知能力を生かして、モノカラーより Secondary Color に熱中する女たちの、未来像を描いてみようではないか。



1988年度後期活動報告

◎第二回講演会 11月8日(火)

「女性史の可能性」

荻野美穂氏 (奈良女子大学助手、神戸女学院大学卒業生)

AWI 会議出席

“Together for justice through Education and Development” のテーマを掲げて、1988年6月27日～7月4日、AWI (ASIAN WOMEN'S INSTITUTE) の会議 (3年毎) がインドネシアのサティア・ワチャナ・キリスト教大学で開催され、岡本前院長、高瀬女性学インスティテュートディレクター、泉教授、黒木氏が出席した。

女性学インスティテュート編集委員

別府恵子、松田高志、内藤純子、高島進子、上西妙子 (ABC順)

編集：神戸女学院大学女性学インスティテュート

発行：〒662 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)52-0955(代)